

# 「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

## 1 生育状況（実証ほデータ）

草丈、茎数、葉齢、葉色は、前年並みとなっている。

葉齢を揃えて比較すると、草丈、茎数、葉色は、前年並みとなっている。

表1 「富富富」の生育状況（7月10日 栽培実証ほ）

品種	年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色	
				(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD
富富富	H30	5月15日	60.5	25.3	554	11.6	4.3	39.5
	H29	5月14日	61.5	27.2	567	11.6	4.2	38.7
コシヒカリ	H30	5月13日	69.7	24.4	512	12.1	4.2	36.7
前年比・差		1	98	93	98	0.0	0.1	0.8
コシヒカリ比・差		2	87	103	108	-0.5	0.1	2.8

注) 富富富栽培実証ほ23か所平均

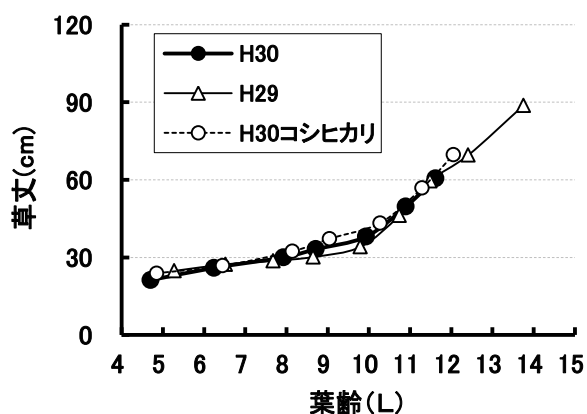


図1 草丈の推移（富富富実証ほ）

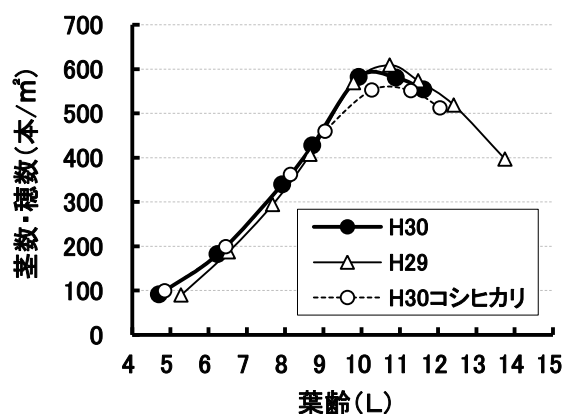


図2 茎数の推移（富富富実証ほ）

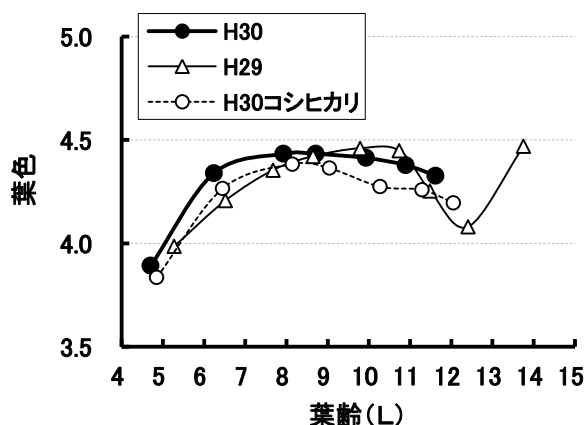


図3 葉色の推移（富富富実証ほ）

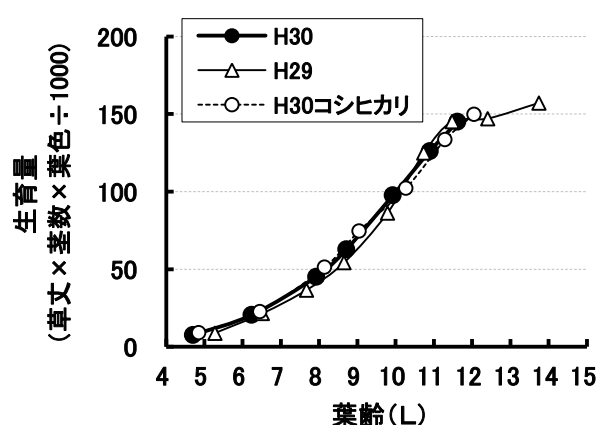


図4 生育量の推移（富富富実証ほ）

## 2 当面の技術対策

- ・根や稲体の健全化のため、中干し後、出穂期まで間断かん水を行う。
- ・ただし、高温で推移することが予報されており、田面が乾きすぎないように注意する。
- ・幼穂形成期の葉色が淡いほ場（SPAD 値 39 以下）では、幼穂形成期から出穂期まで飽水管理を行う。
- ・生育が旺盛な分施栽培ほ場では、1 回目の穂肥を無施用とし、過剰籾数を防ぐ。

### (1) 「富富富」の幼穂形成期及び出穂期の見込み

平成 30 年「富富富」の幼穂形成期は、コシヒカリに比べて 1 日程度遅い 7 月 12 日頃と見込まれる。

また、今後平年並みの気温で推移した場合、「富富富」の出穂期は、コシヒカリに比べて 2 日程度遅い 8 月 4 日頃と見込まれる。

表2 富富富とコシヒカリの幼穂形成期及び出穂期

年次	試験場所	移植日 (月/日)	幼穂形成期(月/日)			出穂期(月/日)		
			富富富	コシヒカリ	コシ差	富富富	コシヒカリ	コシ差
H30	農研	5/1	7/6	7/5	1	(7/29)	(7/27)	(2)
		5/7	7/10	7/9	1	(8/2)	(7/31)	(2)
	現地	5/15	(7/12)	(7/11)	(1)	(8/4)	(8/2)	(2)
H29	農研	5/1	7/6	7/6	0	7/28	7/26	2
		5/8	7/8	7/8	0	7/30	7/28	2
	現地	5/16	7/11	7/11	0	8/2	8/1	1
	現地	5/14	7/12	7/11	1	8/3	8/1	2

注1) 表中の括弧内の数値は予測値

注2) 現地データは、展示ほ23か所(H30は7/10に幼穂長が確認できた19か所)の平均値

### (2) 水管理

- ・中干し後は、間断かん水により、根や稲体の健全化に努める。ただし、高温で推移することが予報されている（7月5日、9日に高温に関する異常天候早期警戒情報が発表）ので、田面が乾きすぎないように注意する。
- ・幼穂形成期の群落葉色が 4.2（SAPD 値 39）以下の場合、稲体の栄養状態の維持のため、幼穂形成期～出穂期まで飽水管理を行う。

### (3) 「富富富」分施栽培における穂肥施用の目安

#### ① 「富富富」の分施栽培における穂肥施用の基本体系

- ・分施栽培における穂肥は 1 回目を幼穂形成期の 5 日後に窒素成分で 0.75～1.0kg/10a、2 回目を1 回目の 5～7 日後に窒素成分で 1.5kg/10aを基本とする。

#### ② 「富富富」における幼穂形成期の生育の目安

表3 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	m <sup>2</sup> 茎数 (本/m <sup>2</sup> )	群落葉色	SPAD	生育量
63	480 ~ 550	4.0 ~ 4.2	38 ~ 39	125 ~ 145

注) 生育量: 草丈×茎数×群落葉色÷1000

### ③「富富富」分施栽培における穂肥施用の基準

#### <1回目穂肥の基準>

- 分施栽培においては、表3、図5を参考にし、幼穂形成期の生育状況に応じて穂肥施用を判断する。

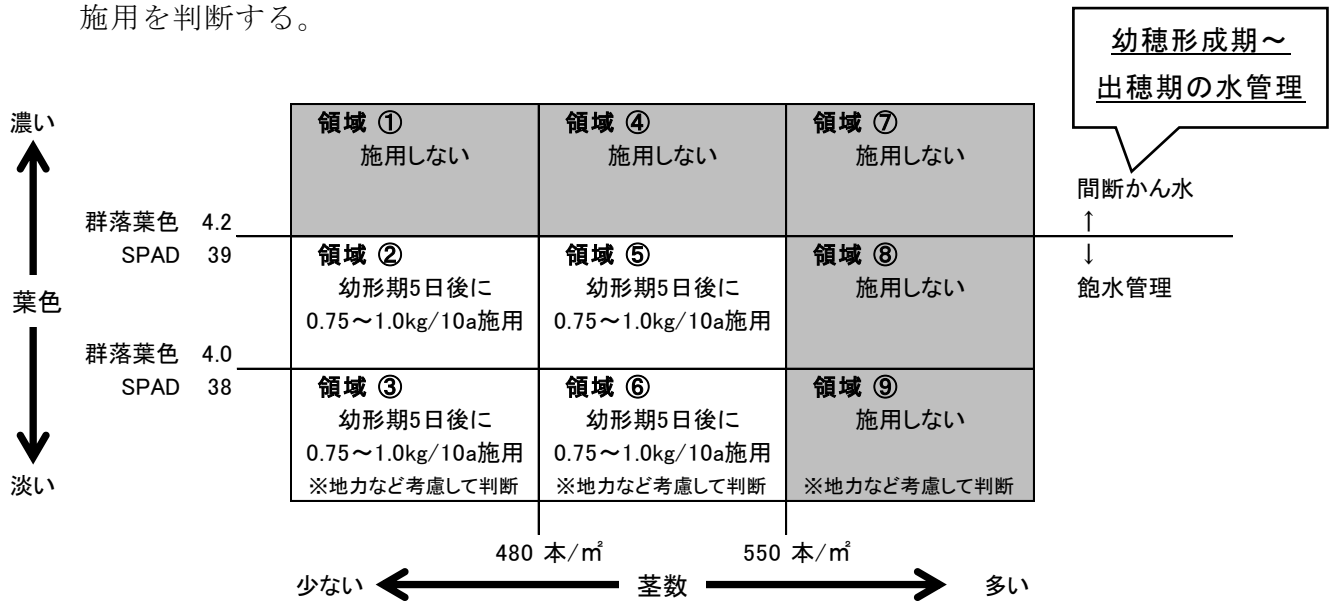


図5 幼穂形成期の生育に基づく1回目穂肥施用の目安 (H30年度暫定版)

#### <2回目穂肥の基準>

- 1回目の5～7日後に窒素成分で1.5kg/10a施用する。ただし、1回目穂肥を施用しない場合は、幼穂形成期の10～12日後に窒素成分で1.5kg/10a施用する。
- ただし、幼穂形成期の葉色が淡い図5の領域③、⑥、⑨については、茎数と地力を考慮して、表4にあるように2回目穂肥量を加減し、稲体の活力維持に努める。

表4 幼穂形成期の葉色が淡い場合の穂肥量の目安

領域	茎数	葉色 SPAD(葉色値)	地力	穂肥量(N・kg/10a)	
				1回目	2回目
③	480本/m <sup>2</sup> 以下	38(4.0)以下	低	0.75～1.0	1.5
			高	0.75～1.0	1.0～1.5
⑥	480～550本/m <sup>2</sup>	38(4.0)以下	低	0.75～1.0	1.5
			高	0.75～1.0	1.5
⑨	550本/m <sup>2</sup> 以上	38(4.0)以下	低	0	1.5～2.0
			高	0	1.5

注) 穂肥施用時期 1回目:幼穂形成期の5日後、2回目:1回目の5～7日後

参照 地力分類の目安

地力	土性	排水性	コシヒカリ 肥効調節型肥料
低	砂地	乾田	1号タイプ
高	粘質	半湿田	2号タイプ

### (4)「富富富」肥効調節型基肥栽培の管理

肥効調節型基肥栽培においては、原則、追加穂肥は施用しない。

#### <追加穂肥を施用しない理由>

適正な基肥量(地域慣行コシヒカリの80%)が施用されている場合、

- ① 今後必要な穂肥成分量が溶出すること
- ② コシヒカリに比べて稲体が小さく、葉色が濃くなりやすいこと
- ③ 高温でも品質が低下しにくいこと

#### (5) その他の管理

病害虫および雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるように留意する。